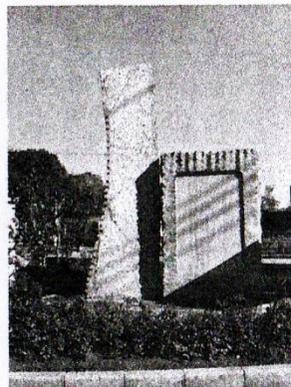


2. 阿部知二『城』

——田舎からの手紙——

阿部知二は中学教師である父の赴任に伴い、9歳のとき、姫路市坊主町に越してくる。坊主町は城北の中堀に接する閑静な屋敷町だ。彼は旧制姫路中学（現・姫路西高等学校）4年で、旧制第八高等学校（現・名古屋大学）から東京帝国大学英文科を卒業している。昭和11（1936）年の『冬の宿』が代表作で、昭和16（1941）年に発表の翻訳『白鯨』も翻訳の代表作となった。

姫路城西御屋敷跡庭園「好古園」の東、「内堀」沿いを北へ歩くと、小径は「北勢隠門跡」を経て「清水門」に至る。そこに架かる「清水橋」の袂に「阿部知二『城』文学碑がある。



■阿部知二『城』文学碑

碑文は次ページ引用文の太字部分だ。

『城』（東京創元社刊S24）の書き出し他を少し長いが姫路城の歴史や戦火を免れた様子がよく分かるので、引用する。

（この市街の真中の、樹におおわれた低い岡の上に、白く塗られた城があって、「白鷺」という名でよばれているが、たしかに、空に羽根をひろげた大きな白い鳥のような感じを

あたえる。内部はからっぽなのだが、外から眺めたところでは、日本でもっとも巨大で壮麗な城だ。——いまから六百年ほど前、建武中興のころに、土地の豪族がこの岡の上に小さな砦をきずいたことから、その歴史がはじまっている。そののち、豊臣秀吉がまだ羽柴といていた時に、中國地方を征服するため、この近畿の西端の土地を、彼の根據地としたことから、城の重大さがまってきたのだ。が、まだその時は天主閣は三層のものだった。徳川の時代になっても、西南の勢力をここで監視し喰止めるという意味は變らなかつたから、家康の女婿池田輝政が百万石の大名となつて来て、五層の天主閣、三つの小天主閣、その他の造営をした。それでは、今日に見る城の形が出来上つた。でこの小説ははじま

ている。

へいつたい、この城は、全國の他の多くの仲間が、自然力や人力で、つきつきに倒れて行つてしまつた後まで、ふしぎにも粘りつよく生き残ってきたものだ、とぼくは感心する。近い世になつても、三つの危機があつた。その一つは、明治維新の時だ。そのとき、全國の各地方で、舊制打破の狂熱的な民衆の浪がたかまって多くの古刹や城が、うち毀しの運命に逢つた、ということとは君も知っているとおもうが、その時にも、この街の人たちは、天主閣はおろか、どの小さな櫓ひとつも破壊しようとはしなかつた。そうして城は、第一の革命の嵐を、かすり傷も負わずに通過してきた。しかし、明治の中頃に、一度、自然死のように崩れそうになつてきた。その時に、ある熱心な人たちが、犠牲的な奉仕をして、根本的な大修繕を加えたので、第二の危機もまぬがれることができた。だが、最後におそるべき運命がきた。いまから三年前、敗戦の直

前のある夏の夜に、この町もB29の編隊の爆撃をうけ、城の南も東も西も北も、その足元まで火がふり注ぎ、町は大半焼けてしまつたが、どうしたということだろう、ただこの城の一廓だけが、すこしも焼けずに残つたのだ。空がいちめんに赤々と燃えあがつていた時、疾風と轟音とがうず巻く真中に、城は、その白い臺と壁とを火の色に染められながら、晝

た街に焼けずに残つた城を思い起こしながらこの歌詞を書いたことには想像に堅くない。彼の代表作は、『冬の宿』は雑誌『文学界』に連載され、昭和11（1936）年、単行本になると、たちまちベストセラーになった。舞台は武蔵野の面影を残す一帯にあつた下宿である。

間にみるよりもけさやかに空にきらめきながら立つていたのだが、それは、妖しい生命をもち妖しい美をもつ一つの怪鳥、生靈、とでもいふべき姿だった。

知二は母校、県立姫路西高等学校の校歌も作つた。

この歌を作りながら、知二は大半焼けてしまつ



■紅葉の好古園

校歌の二番
空むらさきに白き城
雲行き雲はながれつつ
むかしも今も人みなは
力と美とをたたえきめ